

あを



25

03.1

のせのまへ
魚の王をくわす
事のゆき

明子井武



武井明子 書

俳句 / 佐藤喜孝

酉の市傘をたたむで入りけり
三の酉晝の空あるにはたづみ

酉の市貫く道の雨に濡れ

酉の市運び込まれし長梯子

晝前に手ぶらで歸る三の酉

酉の市傘を擔いで歸りきし

穿かず捨てぬ靴箱を積む十二月
枯草を払ひ釣師のゴム長去る
片つぽの靴が残れり忘年会
クリスマス街に小さな靴屋なし
のぞき込む寒鮎はねて靴ぬらす
ほどびたる静の木沓菊人形
帝釈様の廊下つめたし靴提げて

酉の市
佐藤喜孝

竹内弘子

瀧春一瑞牆山が紅葉する

お人形しつかり抱いて十二月

はしなくも冬至南瓜を斎の膳

冬至湯にあぎと尾鰭を庇ふなり

歳晩の拍子木鳴らし墓地ぬける

妹も酒ぐせ悪くクリスマス

去年今年ポンボン時計頭の上に

粉雪や飛驒は紅緒の下駄を売る

曼珠沙華葉のあをあをと冬立てり

冬ざるる一つに吾も歩をいそぐ

二十輛貨車過ぐるまで寒風裡

えぞしかよ綿虫が舞ひはじめたぞ

夫なしの枯野の広さおそれけり

孫と飲む“越の寒梅”冬の駅

桔野

田中藤穂

堀内一郎

日の中を反嘴鳴はとほりぬく
反り橋の眞中に下駄の影ながし

菊かをる反魂丹を掌

横たへし腸うごくアルタイル
剥落の鼻に秋日の掠りたる
蠅燭にシテ百万の足袋の影
初雪や長靴ちやうかの紐の堅結び

信長の衿に水さす菊人形
柴折戸の棧に渋りや冬に入る
黄落やウエイトレスの細身なる
綿虫や遠目するとき人の老ゆ
身ぶるいする蜂に冬日の移りけり
夜を寒み絵蠅燭の位置替えてみる
うそまこと齡かさねて十二月

後藤志づ

吉弘恭子

小春日や大道芸の人を呑む
小春日や縄跳ぶ少女影躍る

追伸のやうに雨来る師走かな

椋鳥に揺るる桟や日を揺する

よそゆきの顔に抱かれし冬の薔薇

赤信号背すぢ伸ばして師走なる

年の暮賑やかすぎて孤独なる

靴磨く鼻はピノキオ冬の駅

淑氣かなジヨージ・チャキリスの靴の先
ただひとりの人の靴音毛糸編む
衿を立て五感をつんと研ぎ澄ます
逆縁のお蝉を揺らす隙間風

くつ

篠田純子

斎藤静枝

鎌倉喜久恵



をどり出る滝のしぶきや岩を捲く

草の絮風とも知らずはなれゆく

あきあかね空いつぱいに染絢

淡あはと紫の野や松虫草

遠き黄はをみなへしかと目を細め
大ジヨツキぐりぐり動く喉仏
何鳥か声落しゆく秋の谷
秋風に白髪のたつをかしかり
走り雨水引草に露置いて
山荘の夕餉に霧の通りゆく
谿割つて二段にをどる乙女滝
白雲のいよいよ白し秋の山